

あとがき

今回の展覧会はマックス・ノイマンMax Neumann (1949-)の最新作の油彩、ドローイングの展示である。ノイマン展は1987年5月に当画廊で開催しているので、これが2年振り2回目の展覧会である。

昨年5月、私は西ベルリンを訪問した。それはベルリン・東京現代美術交流展に出席するため、山田正亮さんと一緒に娘の真知を伴い出掛けたのである。その際、ノイマンに逢いたいと思ったが、彼はイタリヤのピサで仕事中で逢うことはできなかった。しかしながら、ノイマンの作品には出逢うことができた。ノートヘルファー画廊の主人ノートヘルファーさんが画廊、倉庫そしてノイマンのスタジオに案内してくれた。自動車で3ヵ所を移動したが、ノートヘルファー氏はなかなか元気で精力的であり、自動車の運転にもそれが現われており、いささかヒヤヒヤしたのを憶えている。私はそこでノイマンの作品(油彩、ドローイング)を十数点選んだのである。いま、私の日記をひっくり返してみるとそれは1988年5月28日のことである。

それから丁度半年後の10月下旬、私はニューヨークからパリへと旅し、それぞれ一週間ばかり滞在した。パリではグラン・パレで開催中のフィック(アートフェア)をみたが盛況であった。その会場にノートヘルファー画廊がスタンドを出しておらず、そこで、ノイマンに逢った。私がパリに来ることはノイマンに連絡済だったので、彼はわざわざパリまで来てくれたのである。サンジェルマンの日本料理屋でノイマンと私と女房の3人はヤキトリに日本酒を少々飲みながらこの展覧会の打ち合せを行った。彼の持参した十枚ばかりの最近作油彩のカラーポジから、彼と話し合って5点の作品を選んだのである。今回の展示作品は以上のような経緯で選ばれたものである。

ノイマンは今年40歳のドイツ人である。金髪で、鼻は高く、背も高い、典型的なドイツ人である。彼の人柄は服装なども

簡素で、もの静かで、やさしい心根の持主である。表面だけみていては彼の作品の恐しいまでの激しさがどこに隠されているのか分らない。どうも彼の精神の深い内部に、じいっと彼の想いが秘められているように思われる。そのかずかずの想いがグワーと「念力」的なプロセスで表現されてくるのである。しかもその表現されるイメージのかたちが尋常ではないのだ。彼の想いと言ったが、それは彼の心のヒダに何時しか刻まれ残されたかずかずの深層心理的な風景、心象風景、すなわちわれわれが意識的、無意識的にみて知っているものだが、奥深く心の奥に隠されていて日常では不可視なものなどであり、それらが突然、瞬発的にガバッと彼の手によって引き出され、表現されるのである。それが私の胸を打つのである。最近の彼の作品は平らに塗られた静止的なものもあるが、私の思うに、それはノイマンの心のヒダに残っている傷痕のごときものを彼は平らに塗り静めているのではなかろうか。それにしてもノイマンの作品にはドイツの重いにおいと香りが漂っている。他の民族では表現し得ない独特のもので、彼の絵をみているとつくづくドイツ人の絵だなと思うのである。

今回のノイマン展カタログのテキストは水沢勉さんにお願いし、「影を曳く」——マックス・ノイマンの新作について——と題するエッセーをご寄稿いただいた。一読し、ノイマンの本質に迫る優れたもので、私は教示されるところが多かった。深謝申し上げる。

この展覧会のオープニング・パーティには、作家のノイマンとノートヘルファー氏が西ベルリンから出席の予定である。一週間ばかり日本に滞在の予定であるが、日本滞在が快適なものであるよう願っている。最後にマックス・ノイマンさんの一層の精進と健闘を祈るものである。

1989年3月12日

佐谷画廊

佐谷和彦